

東大現代文解説

Anchor

平成26年度 第四問

収録

ver. 1.5



初めに.....	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	5
平成26年度 第四問.....	7
解答例	7
本文解説.....	7
本文解説.....	9
設問（一）	9
設問（二）	13
設問（三）	17
設問（四）	24
最後に	29
引用文献・著作権表示.....	31

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければならないということだ。言い換えれば、問題文に書かれていない専門知識だけを根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、問題文に根拠を求めるということは、筆者が何を伝えたいかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えなかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければならないということだ。論理的に考えるだけが、現代文の妥当な解答へと向かう道である。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞だけを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ＜虎の巻＞を参照してから、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とすることが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というのは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてこの教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。もちろん、論理性を欠いてもいけな

い。時折見られるような、解答に必要な要素をただ連ねただけで、論理のつながりを無視した文章もいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、 Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学がWebページで公開している「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章を読むことで、東京大学がどんな能力を測ろうとしているのかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このような東京大学の示す方針はAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

1. 文章を筋道立てて読みとる読解力
2. それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。(引用終わり)

平成26年度 第四問

——蜂飼耳「馬の齒」——

解答例

設問（一）	初対面の人との出逢いや対話が、何気なく過ごす毎日のなかに、新鮮な驚きを突きつけてくるということ。（48字）
設問（二）	本のページをめくり未知の言葉と出会うように、台風一過の植物園では、台風によってもたらされた未知のものに出会えるということ。（59字）
設問（三）	曖昧なことを言葉で明確化しようと問うても、常に仮の輪郭しか得られないが、その営みによってしか新しい発見はもたらされないということ。（66字）
設問（四）	未知を求めて問う営みは、文字によってだけではなく、手に取ったものから広げていった想像によってもなされるうるということ。（59字）

本文解説

エッセイ型の文章だ。エッセイの本文読解の虎の巻を適用しよう。ただし、虎の巻を利用しながら読解してもなお、本問は主題を問うのが難しいかもしれない。この文章の主題をあえて論じるのであれば、問うことから広がる想像の世界とでも言えるだろうか。

筆者は初対面の人のお話す話題から疑問を持って、その疑問から「想像力の翼」を広げて様々な景色に自由に移動している。作者にとっては問いとは脆い光なのかもしれないがそれは「もっと遠くへ届く光」なのである。この文章は問うということについて、日常の会話の断片の中から考えたエッセイと言えるだろう。エッセイとはフランス語でessai、これは日本語に訳すと「試み」となる。本運は厳密な論理や

明快なわかりやすさはないかもしれないが、どこかおかしみと温かみのある、けれども何か重要なことが隠されているようなそんな文章ではないだろうか。じっくり読んで、味わってほしい。

テーマ	体験・観察	解釈
<p>未知との出会いとそこから生まれる問い、そしてその問いからはじまる未知の探求・想像の世界</p> <p>それは限界づけられてはいないものの 問うことによって広がっていくもの</p>	<p>1、初対面の人との出会い</p> <p>「仕事の打ち合わせでだれかとはいじめて顔を合わせるとき。そんなときには、互いに、見えない触角を伸ばして話題を探ることになる。」</p>	<p>1、日常にずぶりと差しこまれる体験</p> <p>「自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知るとは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている。」</p>
	<p>2、植物園の話</p> <p>「台風の後には、植物園に直行するんです。」「その植物園には、いろんな種類の松が植わっていて。台風の後には、こんな大きい松ぼっくりが拾えるんです。」</p>	<p>2、植物園と本の類似性</p> <p>「植物園もまた本に似ている。風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちてくる。植物園に通うその人のなかにも、未知の本がある。耳を傾ける。生きている本は開かれないときもある。こちらの言葉が多くなれば、きっと開かれない。」</p>
	<p>3、馬の歯の話</p> <p>「あのあたりでは、馬の歯を拾えるんです。（中略）中世に、馬をたくさん飼っていたのでしょう。」</p> <p>「あれは馬です。（略）きっぱり答えました。」</p>	<p>3、「はじめて教えられたことだけが帯びるぼんやりとした明るさの中であって、心ひかれた。」「馬なのかな、馬だったのか、確かめることはできない。」</p> <p>「これはなんだろう、という疑問形がそこにあるということだ。問いだけは確かにあるのだ」</p>
	<p>4、吉原幸子の詩の話</p> <p>「ある日、吉原幸子の詩集『オンディーヌ』を読んでいました。」</p>	<p>4、「あれはなんだったのだろう。そんな風に首を傾げて脳裏の残像をなぞる瞬間は、日常の中にいくつも生まれる。多くのことはあいまいなままきえていく。足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すことから、光がこぼれる。」</p> <p>「わかることとわからないことのあいだで、途方に暮れるすがたを刻む。」</p>

本文解説

設問（一）

問題	「日常の中にずぶりと差しこまれる」（傍線部ア）とは、どういうことか、説明せよ。
解答例	初対面の人との出逢いや対話が、何気なく過ごす毎日のなかに、新鮮な驚きを突きつけてくるということ。（48字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 問われているのはどういうことか考えてみよう。・ 回答の方向性を考えてみよう。 <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 日常とはなにか考えてみよう。日常と非日常の差異はなんだろうか？・ 日常の中にずぶりと差しこまれるとはどういうことだろう？・ すぶりという言葉が持つニュアンスを考えてみよう。・ 差しこまれるという受動態のニュアンスを考えてみよう。

構成フェーズ

設問は、「日常の中にずぶりと差しこまれる」（傍線部ア）がどういうことかと問うている。傍線部アだけでは何を言っているかが具体的ではなく、いわば筆者独特の言い回しがなされている。この筆者の独特な言い回しがどのようなことを言おうとしているのかを、説明しなさいというのがこの問題の問うていることであろう。

問題が問うていることがわかった。次はその問いにどう答えるかの大きな方針を考えていこう。回答の方向性は傍線部アがどのような事態を言い表してるかを説

明すればいいのだから、傍線部アの言葉の内容を具体的に検討していけばいい。まず傍線部アには主語がない。この文章の主語は何かを考えてみよう。前の文に「初対面の人と向き合う時間は」とあるので、これが主語だとわかる。

では、初対面の人と向き合う時間が日常の中に入ってくるとはどういう事態か、それはなにをもたらすのか、そのことを本文を読解しながら考えていこう。

読解フェーズ

みなさんにとって日常とはどのようなものだろうか？学校に行ってたわいもない話をしたり、あるいは部活や勉学に精を出したり（勉学に精を出すのはテスト前の非日常だろうか？笑）、友達と一緒に何の話をするわけでもなく下校したりすることだろうか？

日常とは「なにげない日常」とよくいわれるように、とくに変化もないと感じられ、習慣的に過ごすことができる時間と言ってもいいだろう。

そういう何気ない日常で普段の生活は満たされている。けれども、ふとした瞬間にそんな何気ない日常のリアリティが揺らぐこともあるかもしれない。

例えば、ふと見上げた空の夕焼けがいつもよりも綺麗だったこと、あるいは気になる異性あるいは同性ができたこと、昔からあったお店が潰れてしまったこと、そういう時何気ない日常に何か不思議なものが持ち込まれた感じを覚えた人も多いのではないだろうか。そういう体験は非日常的な体験と言っていいのではないだろうか。

筆者にとっては、おそらく多くの人にとっても、初対面の人と出会うことは日常的な体験ではない。相手がどういう話題を振ってくるのかわからない。気心がしれた友人と会うときとは異なる緊張感がある。けれども初対面の人との話が盛り上がると、なにか普段の会話では体感できない楽しさや充実感を得られたりする。それは日常の惰性を超えていくものだからなのかもしれない。つまり、日常というある種の変わらない風景が一変して、新しい風景が見えたことによる高揚感なのではないか。

筆者は「自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知るとは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている。」と述べる。

初対面の人との出会いやその人との対話は、日常にそうした非日常的なものを持ち込む。これが「日常に差しこまれる」ということで筆者が言い表そうとしていることなのではないか。ここまででだいたい回答の大枠は決まる。

さらに進んで、「ずぶり」という言葉が持つニュアンスを考えていこう。

「すぶり」という言葉は、柔らかく弾力性のないものに刺さるというニュアンスを持つ。「ぶさり」は柔らかく弾力性のあるもの。固いものには「ぐさり」が好んで使われるらしい。「ずぶり」は「ずぶりとぬかるみにはまり込む」などのイメージがぴったりではないか？

本文では初対面の人と話すことが「日常にずぶりと差しこまれる」と述べている。

初対面の人と話すことは疲れる。相手がどのような人かもわからないし、どういう話題をしていいかもわからない。場合によっては少し沈痛で陰鬱な気分になる。知っている人とたわいもない会話をするのが日常としたら、初対面の人と話すのは非日常のことだ。

そうした非日常が日常に「ずぶり」と差しこまれるのだ。そしてその非日常は向こうのほうからやってくる。相手がどういう人なのかもわからない。もっと言うといつ誰と初対面するかもわからない。初対面という非日常は向こうからやってくるのだ。

これが受動態のイメージではないだろうか。では、そのような非日常が「ずぶり差しこまれる」ことで何が起こるのだろうか。それは日常に何かしらの変化が生じるということだ。しかもそれは、「ずぶり」という言葉の持つイメージのようなゆっくりゆっくりと確実に変化をもたらすのだ。筆者はその変化の中で様々な問いを見つけ、想像を膨らませていくのだ。

以下の回答例も参考に自分なりに回答を考えてみよう。

初対面の人との出逢いや対話が、何気なく過ごす毎日のなかに、新鮮な驚きをじわじわとしかし確実に突きつけてくるということ。（48字）

他社解答例の講評

A社

答案

既知のものに囲まれた日常に、初対面の人と話す時間が割り込んできて、新たな見方を知る機会となるということ。（52字）

Schip採点

2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「新たな見方を知る機会となること」と書いてあるが、何が新たな機会になるのかが書かれておらず、文章が成立していないような印象を与える。しっかりと文章が成立するように文章を書くように意識しよう。また、「日常の中にずぶりと差し込む」とはということかと聞かれているので、「新たな見方を知る機会になるということ」と結んでは、問いに対する答えとしては弱いと考えた。よって読解点、構成点を一点減点した。

B社

答案	同じことが繰り返される日常の中に、初対面の人と話す機会がイレギュラーに訪れ、新鮮な話題が深い印象をもたらすということ。 (59字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

同じことが繰り返されるというのはやや言い過ぎの感がある。そのために読解点を一点減点した。ただ回答の方向性と内容はよいのではないかと思う。

C社

答案	初対面の人と語り合う時間は、自分が当たり前と思い込んでいた日常の世界を不意に揺るがす、新たな驚きをもたらすということ。 (59字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この答案はよくできていると言える。

D社

答案	初対面の人から、その人が独自の関心を抱く話を聞くという体験は、漠然と馴染んできた生活の中で突然起こり、聞く側に新鮮な発見をもたらすということ。(71字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

この回答はよいのではないかと思う。字数が多いため、表現点は0点となっている。

E社

答案	初対面の人と話すうちに、思いもよらない事柄に関心を持つ人の存在を知り、ありふれた日常の中にいきなり異質な世界が立ち現れ、はっとさせられるということ。(74字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

この回答もよいと思うが、もう少しすっきりさせられる部分もあるのではないだろうか。あまりにも接続が多すぎると、文意がぼやけることが多いので注意が必要だ。

F社

答案	初対面の人と話していると、思いがけない話に出くわして、その衝撃が心に刻まれ自明の世界が揺るがされるということがあるということ。(63字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「自明の世界が揺るがされる」とまで言ってしまうのは、言い過ぎの感があるし、それで回答を終えているのは拡大解釈をしすぎなのではないかと思う。そこで読解点を一点減点した。

設問（二）

問題	「風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている。」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	本のページをめくり未知の言葉と出会うように、台風一過の植物園では、台風によってもたらされた未知のものに出会えるということ。(59字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なにが問われているか考えてみよう ・ 回答の方向性を考えてみよう <p>読解フェーズ</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 風が荒々しい手つきで新たなページをめくるとはどのような比喻だろう ・ 見知らぬ言葉が落ちているとはどのような比喻だろうか？ ・ どうして本に喩えているのだろうか？

構成フェーズ

傍線部イは比喩である。この問題で問われているのは比喩で彩られた文章がなにを言いたいのか、どのようなことを言うために比喩を使っているのか理解しているかが問われている。そこで回答の方向性としては、比喩を言い換えて傍線部イの文章が言いたいことを表すということに決まる。つまり、「風が荒々しい手つきで新たなページをめくる」とはどういうことか？と「見知らぬ言葉が落ちている」とはどういうことか？を考えていけばいい。

読解フェーズ

傍線部の直前に、「『台風の後、植物園に直行するんです。』」という言葉がある。そこで、「風が荒々しい手つき」というのは台風のことだとわかる。では新たなページをめくるとはどういうことだろうか？

『台風の後、こんなに大きな松ぼっくりが拾えるんです。』という文章もある。そこで、新たなページをめくるとは、台風によって松ぼっくりが下に落ちてくることの比喩であることが推測される。

ではどうして筆者は台風と本のイメージを重ねたのだろうか？

みなさんにとって本はどんな存在だろうか？時間を埋めるための道具だろうか？あるいは娯楽だろうか？それとも人生の指針だろうか？

筆者にとっては本とは見知らぬ言葉に出会うためのきっかけなのかもしれない。それは未知との出会いであり、向こうからやってくるものなのである。筆者は「生きている本は開かれないときもある。こちらの言葉が多くなれば、きっと開かれない。」と述べる。自分から多くを語るのではなく、向こうからやってくる言葉に耳をすます。向こうからやってくる未知の言葉にハッと驚くこともある。それは「生きている本」と筆者が述べるように、“本”だけから起こる体験ではなく、日常のあらゆる場面で起こる体験なのだ。本のイメージと植物園のイメージを重ねたことで紡がれる詩的なイメージ。そのイメージは「馬の歯」という言葉をめぐってさらに膨らんでいく。それは次の問題の話だ。

まとめよう。台風によって松の木から落ちた大きな松ぼっくり。それは、未知との出会いである。まるで本のページをめくった瞬間に出会う未知の言葉のように。しかし、本を漫然と読んでいてもなにも入ってこないように、注意深く傾聴の姿勢を観察しないと松ぼっくりには出会えない。しかし、向こうからやってくる“言葉”に耳を傾けると、未知のもの、新たな発見に出会うのだ。

まとめよう「風が荒々しい手つきでめくれば」とは台風のことである。そして「新しいページが開かれ、見知らぬ言葉が落ちている」とは、台風によって見たことも

ない松ぼっくりが地面に落とされることである。それは、本の次のページを開いて、今までは見たこともないような新しい発見に出会ったことに似ている。これらをうまくまとめれば回答が書けるだろう。

他社解答例の講評

A社

答案	知らない本のページをめくる瞬間のように、台風一過の植物園ではたくさんの意外な発見に出会えるということ。(51字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

無難な回答であろう。内容・方向性ともにとっつきやすい参考にしやすい回答ではないだろうか。

B社

答案	台風の直後の植物園では、強風によってもたらされた、普段の植物園では見られない未知なものに出会うことができるということ。(59字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

傍線部には「ページ」「言葉」という明らかに本のイメージに由来する比喩表現があるので、本についての記述も必要である。よって構成点を減点した。

C社

答案	ふとしたきっかけが、これまでは見えなかった世界を開き、現実の自然や人間に潜む未知の言葉を顕在化させるということ。(56字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

少し抽象化しすぎである。言いたいことはわかるし、優れた答案ではあるが、比喩の言い換えはあった方がいいのではないかと思う。よって構成点を一点減点した。しかし、全て抽象化して書いた点は他の予備校の回答とは異なっていて、特徴的である。(最初は我々の回答もこの立場だったが、比喩の言い換えは最低限した方がいいだろうということで、現在のような回答になった。第4問は比喩の言い換える塩梅が難しいだろうが、この答案ももしかしたら満点をもらえるかもしれない。)

D社

答案	ページをめくると未知の事柄が現れる本と同様、強風にさらされた後の植物園では、思いがけない未知の様相が現れ、新たな知見がもたらされるということ。(71字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

様相とはありさまや状態のことである。

ただ、難しくしないで、「未知の様相が現れ」ではなく「未知の事柄に出会い」とくらいにすればいいだろう。

単語は自分が使い慣れているものを使えばいい。無理に難しい言葉を使おうとして、意味を深く理解していない言葉を使うのは危険である。注意しよう。

回答の方向性はこれでいいと思われる。

E社

答案	台風の吹き荒れた後の植物園では、暴風によって落下した様々な果実や種子などを手に入れることができ、新たに思いもよらない事柄を知ることができるということ。(75字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

B社の解答についての講評でも述べた通り、傍線部には「ページ」「言葉」という明らかに本のイメージに由来する比喩表現があるので、本についても言及しなければならぬ。この点で構成点を減点した。

F社

答案	平穏な日常的世界であっても平生とは異なった事態が生じると、見慣れない世界が立ち現れ、新たな認識をもたらしてくれることがあるということ。(67字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

ここではやはり、比喩にきちんと答えた方がいい。これでは抽象的すぎる。この点で構成点は減点される。

比喩は明らかに植物園での話なので、それについて言及がないというのは問題に答えていないに等しいのではないだろうか。「平穏な日常的世界であっても平生とは異なった事態が生じると」という意味も不明確であり、矛盾している文章だと捉えられてもおかしくない。これでは本文が読解できているのかも不明瞭である。読解点も減点される。

設問（三）

問題	「その一步は消えていく光」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	曖昧なことを言葉で明確化しようと問うても、常に仮の輪郭しか得られないが、その営みによってしか新しい発見はもたらされないということ。（66字）
思考の目次	構成フェーズ
	<ul style="list-style-type: none">・ なにが問われているか考えよう。・ 回答の方針を決めよう。
思考の目次	読解フェーズ
	<ul style="list-style-type: none">・ その一步とはどのような一步だろうか？・ 消えていく光とはどのようなイメージだろうか？・ どうして光は消えていくものなのだろうか？

構成フェーズ

ここでも問われているのは、傍線部ウの比喩がどのようなことを言うために用いられているかを考えるということである。そこで今回も比喩を具体的に形で言い直すこと、そしてそれがどのようなことを言おうとしているのかを考えていけばいい。

読解フェーズ

「その一步」とは、傍線部の前文に「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一步を踏み出すこと」とあることから、「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えよう」とする一步のことだとわかる。輪郭の曖昧な物事というと「あれは、なんだったんだろう」と日常で思い出すことである。「虹」という詩においては「ぶた」である。電車の車窓からチラッと見えた「ぶた」。

見た瞬間は明快に「ぶた」だと思った。しかし、過ぎ去ってみると「あれは たしかにぶただったろうか」とおぼつかなくなるのだ。ある時には確信したものも時間が経って見るとそれが本当にあったことなのか、あの時の自分は見間違いをしていないかと不安になることがある。この世のあらゆるものは疑いうるのだ。これを

デカルト的懷疑と呼んだりする。つまり、「足元を照らす明確さは常に仮のものなのだ。」

「消えていく光」とはそのように、仮の明確さを表していると考えられるのではないだろうか？日常の曖昧なことに輪郭を与えるのは光である。我々は光なしには物事を認識できない。しかし、その光は常に仮のものであり、またおぼつかない。それでも、いやそれだからこそ物事を明確にしようと光を投じる。それは消えていくと宿命づけられていたとしても、である。光が消えていくのはなぜだろう。それは人間の認識の限界から来るのだろうか。時間は流れて止まらない。電車の速さで見た「ぶた」はすぐに視界から消えてしまう。「ぶた」という記憶が残るだけである。しかし記憶は心もとない。記憶違いなんてよくあることだ。しかし、あえて「あれはぶただったろうか」と問うてみる。そのことで「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与」える。問うことをきっかけに想像が広がり、日常が異なるように見え始める。しかしその問いは常に曖昧で仮のものでしかない。それだからこそ、「一步踏み出すことから光がこぼれる」のである。けれどもまたそのこぼれた光から物事の輪郭が垣間見える。そのようにして、一步踏み出し続けることで何かが立ち現れてこないだろうか？

「ぶただったろうか」と問うことで、「ぶた」とそして「ぶた」以外の何かが思考に現れてくる。

しかし永遠に輪郭の全体を理解しえないということを宿命づけられてまで問うことはどのようなことなのだろうか。詩の最後は「わかることとわからないことのあいだで、途方にくれる姿を刻む」イメージを与える。「確かめられないことで埋もれている日々にかかる虹はどんなだろう。」ぜひ想像してみしてほしい。

最後に、傍線部が体現で終わっていることについて考えてみたい。体言で終わっていれば、体言で終わるように書けと習う人もいるかもしれない。

つまり傍線部を分かりやすく言い換えろということだ。

しかし、どういうことか？問われているのであるから、筆者の主張も十分に精査した上で、筆者の言わんとすることを代弁（represent）しなければならない。

前置きが長くなったが、本題に入ろう。ここでは体言で終わっているが、その言葉を筆者がどういう意図でそしてどのような主張の文脈の中で使っているかを十分に踏まえた上で、筆者の言わんとしていることを再現すればよい。再現の精度はひとまず気にしなくてよい。丹念に文章を読み込んでいこう。そして自分の言葉でまとめる訓練をしよう。解答例や先生の作った模範解答を眺めて、自分の解答をちょこちょこ直すような作業はやめよう。そんなrepresentのレベルでの作業で復習した

り、自己採点をして一喜一憂するのは捨て置こう。まず目を向けるべきは目の前に開かれているテキスト（presence）なのだから。

筆者の言わんとしていることは構成フェーズで考えたとおりである。再び構成フェーズを頼りにしながら文章を読んでいこう。そして、解答例や解説を眺めているだけでなく、実際に解答を作ってみよう。

もし、私たちの解答に不十分なところやケチをつけたいところがあれば、指摘してくれてもいいし、解説を批判してくれたっていい。しかし、テキストをなるべく忠実に読んだ上での話であるが。

大学受験を終えた後は高校とは比べようもない膨大なテキストに埋もれた空間に身を晒すようになる。

そうなった時に現代文にしっかりと向き合ってきた人とそうでない人では天と地ほどの差があるだろう。そして、大学ではテキストを忠実に読み取ることのその先を求められる。そのテキストをどう読み取り、そのテキストの不十分さを補いつつ、知の体系の中に自らに由来のある（original）一石を投じていくことが求められる。採点はされないの自由で思考を羽ばたかせることもあえて誤読を試みることも許される。しかし、その作業はあくまでも一旦テキストを忠実に読み取ることを経験していなければ、くだらないものにしかない。

ピカソだって写実的な絵を描かせてもまた上手に描けたのだから。今の勉強がつまらないように感じていても、避けては通れない局面であり、その先に、その先にこそ、学ぶことの面白さも待っていることを期待しつつ最後の問題に入っていこう。

他社解答例の講評

A社

答案	その意味や正体が曖昧なまま気になっている事柄は、一瞬わかりかけてもまた曖昧なまま消えていくということ。（51字）
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

「消えていく光」を結局は消えていくものと捉えるか、それともその消えていく光がまたその先を照らし出し、さらに次なる光をもたらすのかに関しては解釈の揺れる点であるし、文章中からどちらが確かかは明確に引き出すことはできない。

確かに、筆者は「足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩み出すことから、光がこぼれる。」と言っている。

その一方で「問いによって、あらゆるものに近づくことができる。だから、問いとは弱さかもしれないけれど、同時に、もっとも遠くへ届く光なのだろう。」とも言っている。

ここでは、「その一歩は消えていく光」とはどういうことか？と聞かれているので、確かに前半だけを答えてもいいかもしれないが、その一歩は消えていくにしろやはり光なのである。そこまで踏まえて、その光がさらにその先を照らし出し～というところまで含めるか含めないかは、解釈の問題かもしれない。

この回答は「一瞬わかりかけても曖昧なまま消えていくということ」という落ち着け方をしている。これも一つの方向性ではないかと思う。

ただし、この回答は全体的に消えていくの説明であって、光についての説明は薄いことは指摘しても良いだろう。

B社

答案	確かな認識や理解を得ようと疑問に思うことで答えが明確にわかるわけではないが、答えに近づく可能性を含んでいるということ。 (59字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この回答は、光についても説明しようと心がけている。それは、「答えに近づく可能性を含んでいる」という文言から読み取れる。

消えていくが、物事を照らし出し、それが何かわかるような”可能性”を秘めている、そんな光のニュアンスを出しても良いのではないかと思う。我々の回答はこの解答例に近いものとなっている。

ぜひ、この点に関してはみなさんにも自分で考えてもらいたい。

C社

答案	より確かな認識を問う営みは、未知の事柄を垣間見たときの新鮮な驚きを、束の間の認識として消し去っていくということ。(56字)
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

この答案は、消し去っていくで終わらせている。ただし、「より確かな認識を問う営み」が「未知の事柄を垣間見た時の新鮮な驚きを」、「束の間の認識として消し去っていく」ことがこの回答のポイントではない。曖昧なものの輪郭が明確になったと思えども、常にそれは仮のものでしかないという趣旨のことを筆者は言っている。そのことは、人間に条件づけられていることのように語っている。「より確かな認識を問う営み」が、「新鮮な驚き」を、「束の間の認識として消し去っていく」のではない。それは、自ずと消えていってしまうのだ。また新鮮な驚きが消えるのではない。消えるのは物事の明確さなのだ。物事の明確さは、一瞬それが明確だと思っても、消えてしまうことを筆者は「虹」という詩からも見出している。この答案はそのことに触れておらず、読解も誤っている。そのため読解点は0点とした。また、関連して傍線部の言い換えも一部できていないので構成点は1点とした。

コラム：RepresentとPresence

representとは英語でも習っているかもしれないが、重要な概念であり多義的に用いられることが多い。

代弁、代弁、絵を描く、象徴するなどなどである。しかしどれもpresence (originalなもの) を再び (re) この世にもたらすという意味で通じているのである。議会の代表も市井の人々の声 (presence) を代表あるいは代弁する (represent)。

画家は頭の中にあるイメージや神話の物語や風景や人物といった具象物 (presence) をこの世に絵という手段を持って出現 (represent) させる。

これらは何がしかの存在 (presence) を反復して再び (re) よびおこす (present) ということで通じ合っている。

現代文もまたその作業である。現代文とは、筆者の言葉 (presence) を受験生に代弁-再現前 (represent) させる営みなのである。

すなわち単なる言い換えや文章中の言葉の切り張りでは不十分であるのだ。筆者の言わんとすることを考えた上で、答案にrepresentすること。「どういうことか？」という問題は、「お前は筆者が文章中で書いてることをどう読み取り、どうやって構築し直して、限られた枠内に再現するのだ？」と問われていると考えたほうが良いだろう。多少の読み違いや再現のクオリティが低かったとしても、文章中の言葉の切り張りや単なる言い換え（そのような答案は得てして読みづらい）よりは、しっかり筆者の考えを読み取った上で自分なりの表現をしている答案のほうが印象はよいだろう。

このようなrepresentがしっかりできること。それが二次試験で記述問題を課せられるレベルの位置にいる受験生に求められていることなのであろう。

しっかり練習してほしい。

D社

答案

日常の中で曖昧なまま消えていくものを明確化する行為は、常に仮象をもたらすものでしかありえないが、そうした営みが次の問いへとつながること。（68字）

Schip採点

4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

仮象という単語は手垢の付きすぎている単語であって、あまり使わないほうがいい。

仮象というのは簡単に言ってしまうと、それ自体は現実（的）でないが、現実（的）なような見せかけのことである。

筆者が「曖昧なもの」と呼んでいるものを仮象と呼んでいいのかはこれはおそらく論争的な問題である。

ここでは深く立ち入らないが、何れにせよ仮象という言葉を用いるのは好ましくない。難しい言葉を使えば、いい回答であるような誤解は捨てたほうがいい。レベル1の勇者で、ラスボスは倒せないのだから。

自分の勉強量（受験勉強だけでない）に相当の自信を持っている方は、勝負していただきたいが、そうでないならば自分の背丈にあった仕方に対処したほうがいい。

回答の方向性はよいと思うが、仮象という言葉は用いないほうがいいだろう。

E社

答案	日常の中に表れる様々な曖昧な物事を明確に理解しようと脳裡のイメージを探っても、一瞬わかったような気がするだけで、結局は曖昧なまま忘れ去られるということ。（or 一瞬わかったような気はするが、結局わからないことだけがはっきりしている）（76字 or 74字）
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

これもまたA社と同様の議論である。

F社

答案	日常での疑問に答えを見つけようとしても、ほとんどが達成されず忘れられていくが、問いかけ続けること自体には大きな意味があるということ。（66字）
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

「問いかけ続けること自体には大きな意味があるということ」 そうなのかもしれないが、「その一步は消えていく光」とはどういうことか？と聞かれていて、このように答えるのは多少アクロバティックな印象を与える。よって構成点を一点減点した。

内容的にはいいだろうが、回答の方向性に関しては疑問のつく回答である。

設問（四）

問題	「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	未知を求めて問う営みは、文字によってだけではなく、手に取ったものから広げていった想像によってもなされるうるということ。 (59字)
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なにが問われているか考えよう ・ 回答の方針を決めよう <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 掌にのせるとは何を掌にのせているのだろうか？ ・ 文字のない詩とはなんだろうか？ <p>+ α</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上記の解答例が優れているか考えてみよう。

構成フェーズ

これも「掌にのせて」、「文字のない詩」という文章で表されているものがどのようなことを言っていて、それを通して筆者がなにを伝えたいかが問われている。よって回答の方針としては、掌にのせて文字ない詩を読むという行為を具体的な言葉で表して、それによって筆者がなにを伝えたいのかについて述べていけばいいだろう。

読解フェーズ

掌にのせているのは、松ぼっくりや馬の歯である。「掌に乗せて文字のない詩を読む」人とは筆者が初対面で出会った話し相手のことである。その人は、台風の後、植物園に直行し、大きな松ぼっくりを拾っては楽しむ。その人はまた、海岸で拾った「馬の歯」（本当に馬の歯なのかわからないが）を自慢げに筆者に見せる。その「馬の歯」は中世の人が飼っていた馬のものだろうという推測までする。筆者はそ

の人の話を「もっと聞きたい」と思うのである。筆者にとって詩とはおそらく未知の言葉との出会いである。そしてその人の話は筆者にとって未知の言葉であったと同時に筆者に問いをもたらしただろう。その問いから筆者は「ほんとうに馬なのだろうか」、馬だったとしたら「誰に飼われていたものだろうか」「どんな毛の色だったか」「人を乗せていただろうか」「荷物を運んだのだろうか」などと連想を広げるが、これらのことで「わかることはなにもない」。ただただ「これはなんだろう」という疑問があるだけなのだ。確実にあるのは問いだけである。そしてその問いを頼りに筆者は想像を広げて、輪郭な曖昧な物事に輪郭を与えていくのだ。

このように筆者はその人の話に傾聴することで、未知の言葉に出会い、問いというこぼれゆく光にも似た一步を踏み出していく。これはまさに「虹」という詩を前にした筆者の体験と同じものである。

「文字のない詩」とは、「虹」という文字のある詩のように、連想を広げてくれる営みのことだ。連想を広げてくれる詩とは、文字がなくても成立する。「馬の歯」であっても「松ぼっくり」であっても、そこから問うことを始め、未知のものへと想像を広げて行く営みがあれば、それは詩足りうるのである。

ここまできたらもう文字のない詩を読むとはどういうことかわかるのではないだろうか。じっくり自分で考えてみてほしい。

解答例は以下のようなになる。

未知を求めて問う営みは、文字によってだけではなく、手にとったものから広げていった想像によってもなされうること。 (59字)

これを読んだみなさんも、このように色々な物事に耳を傾けてみて、その物事から聞こえてくる声に耳をすませてみると、日常に未知のものが「ずぶり」と差しこまれ、そこから新たな発見を得られるそんな体験を持てるのではないだろうか。

ところで、これは設問解説としては横道にそれるが、解答例を疑ってみることも必要である。それは設問(三)の芸術フェーズでも考えたことである。この文章の解説を終えるに当たって、ぜひ考えて欲しいことがある。それが、「未知を求めて問う営みは、文字によってだけではなく、手にとったものから広げた想像によってもなされうること。」という私たちが用意した解答の講評を行うということである。もし優れているのであれば、どのような点が優れていると思うか、もしそうでないならばどのような点が欠けていると思うか。考えて欲しい。

予備校などの用意した解答案を見る際も同様に友人などと講評してみるのも面白いかもしれない。

この答案のこのような点が優れているあるいはこのような点が欠けている。このような視点があつたら更に良くなるなど友人と語り合ってみると、案外新たな発見を得たり、足りていない知識を痛感したりできるのではないだろうか。その方が記憶も長く続くかもしれない。

ということで、この答案についてもぜひ考えてみたり、語り合ったりしてみしてほしい。

ただし、印象だけでなくしっかりと文章を読み、足りていない知識があるならば補った上で、考えたり、語り合ったりすることが肝要であることは繰り返しておく。

他社解答例の講評

A社

答案	ささやかな事物に興味を持ち、豊かな想像力によって見知らぬ自然や歴史へ思いを巡らせる人もいるということ。(51字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

見知らぬ自然や歴史へと思いを巡らせることだけが、詩人なのであろうか。曖昧なものすべてに対して、その曖昧なものの何かを垣間見せてくれるそのような存在を詩人と言っているのではないだろうか。そうであると、見知らぬ自然や歴史というのは限定しすぎの感がある。また、「掌にのせて」ということもうまく表現できていない。よって構成点と読解点を一点減点した。

B社

答案	普通の人に興味を持たないものについて嬉々として語り、こちらの想像力を掻き立てて、問いを呼び起こさせる人がいるということ。(60字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

「普通の人に興味を持たないものについて嬉々として語り」という文が必要かどうか疑わしい。それよりも、「掌にのせて、そんな詩を読む人がいる」とはどういうことかについて述べたほうがいい。よって構成点を減点した。

また、この答案は「文字のない詩」とは何かについても十分に説明していない。よって読解点も減点した。

コラム：人間に確実なことはわかるの？

「人間に確実なことってわかるの？」という問いは遥か昔から、人々を惹きつけてきた。みなさんは、どう思われるだろうか。確実なこと（真理と言い換えられる）を人間は掴みうるか否か。これは重要な問題である。確実なことをつかむことができれば心強い。なぜなら確実なことに対しては誤りはないからだ。例えば、彼/彼女が確実に自分のことを好きだと思っていれば、何の苦労もないだろう。あるいは、政府が英語教育を充実させれば、日本人の英語は確実に上がると分かればそれに異論を唱える人も少なくなるだろう。「確実さ」は人間を安心させるのだ。しかしながらその確実さを人間は把握できるのか？

一神教の世界においては、神の全能さは確かである。そしてその神がこの世を適切な形で作りなされた。それに対して神の言い付けを破った人間は不完全である（禁断の果実）。そんな人間は確実なものに至れるのか否か。至られるのであればそれは、学問を積むことか、それとも修行をすることか、あるいは神秘的な体験をすることか。何れにせよ、確実なものがあることは前提とされていた。しかしながら、近代精神（科学）の発達とともに、神の存在さえも否定された。それに変わって、科学が信仰の対象になっている。科学的に実証されたと言われれば、効果があると思ってしまう。しかしよく考えてみよう。たかだか数万回の実験（帰納法）で確実だと言えるのだろうか？数万回に効果があっても、数万1回目に効果がないかもしれない。あるいはドリカムの歌詞のように「1万回ダメでへとへとになっても、1万1回目は何か変わるかもしれない」と希望を持つこともできる。このように世のあらゆることは疑うことが可能だ。デカルトはその先に、「我思う、故に我あり」と言った。

究極的に確実なものがない（全能の神はいない、科学は疑いを持つことが可能でありその態度こそ科学的でもある）中で、人間に何か「確実なもの」は捉えられるのだろうか？筆者は、一瞬わかったとしても、曖昧なまま消えていくと知っている。しかしそれは問うことによって、近づくことはできるのではないだろうかとも知っている。完全に把握できなくても、近づくことはできるのではないか。それが筆者の考えてることだといってしまったら、穿ち過ぎであらうか。

いずれにせよ、人間は何か確実なことがわかるのだろうか。そもそも確実なこととは何か。その問いは未だに結末を迎えていない。しかしながらこの問いは人間のあり方、あるいは根本的な人間観、さらには社会観まで通じてしまう。確実なことがわかるのだとしたら、失敗はどうして起こってしまうのか。検証不足なのか、勉強不足なのか、情報不足なのか。

確実なことがわからないのだとしたら、私たちの生活はどうして秩序づけられているのだろうか。あるいは秩序づけられるのだろうか。何を基準に生きればいいのか。

みなさんはどう思われるだろうか。ぜひ考えてみてほしい。

C社

答案	未知への想像力をもって問い続けることで、現実の自然や人間は不思議な魅惑に満ちた詩の世界として立ち現れてくるということ。 (59字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

この答案は、比喻の言い換えをしていない。この点は設問（2）と同様である。この回答もいいたろうが、比喻の言い換えはした方がいいのではないだろうか。よって構成点を一点減点とする。「現実の自然や人間が不思議な魅惑に満ちた詩の世界として立ち現れてくる」という点も、わからなくはないが、本文から確かな根拠をもって読み取るのは困難である。よって読解点も原点とした。

D社

答案	珍しく意味ありげな事物を手にしてさまざまな疑問を抱くことで、言葉に拠らずに豊かな想像力の世界を広げる人もいるということ。 (60字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

「珍しく意味ありげな事物を手にして」と限定されるのかが不明である。また言葉によらずにというのも不明である。

筆者は文字ない詩と言っているだけで、言葉のないとは言っていない。実際に初対面であった人は、話し言葉で事物から想像力を広げて語っている。

言葉に拠らずにというのと文字に拠らずにというのは、全く異なることである。文字とはいま、皆さんが見ているような記号である。当然、書き言葉（文字）ではない話し言葉（音声）も存在する。それも否定して、言葉に拠らずと書いてしまうのよろしくない。よって読解点を減点した。

E社

答案	ありふれた日常の中で、よくわからないものに対して虚心で何だろうと問いかけることで、日常とはかけ離れた豊かな世界を想像力によって広げる人もいるということ。(76字)
Schip採点	2点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：-1点

この回答は、掌にのせて詩を読むことがどういうことなのかについての説明が曖昧である。

作中で引用される詩人と類比する形で、初対面で出会った印象的な人について筆者は語っているのである。筆者にとって詩がどういう存在なのか、そして初対面で

出会ったその人の語った内容と詩がどのようにリンクしているのかについては述べられてはいるが、では「掌にのせて」ということのニュアンスはどこで出しているのかというと曖昧である。このことについても述べなければならないだろう。よって構成点を減点した。また、字数が75字以上と多いため表現点を-1点とした。

F社

答案	他の人が気につけないような事柄に注意をそそぎ、問いを発し想像力を広げることで日常を超え出た世界を感じ取ることに、詩の意義があるということ。(69字)
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：0点 表現点：0点

「詩の意義があるということ」ということもまたアクロバティックな印象を与える。またこの文章では、問いに対して明確に答えていることにはならない。問いは「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」とはどういうことか？である。

それに対して、「詩の意義があるということ」という回答は変ではないだろうか。聞かれていることに対してどう答えるのかについても意識してほしい。回答の答え方が間違っているなので、構成点は0点とした。

最後に

以上のように各社の模範回答を見てきたが、模範回答が十分信頼に足るものではないことが理解できたのではないだろうか？

それはもちろん我々の回答についても言えることである。回答は常に暫定的なものである。大事なことは、自らが納得した回答を作ることである。その際には、文章中にしっかりと根拠を見つけ出すことを忘れないようにしよう。

文章をどのように読み解くか、書いてあることをどう解釈するかは、人によって差が出る。実際に、我々が回答を作る際にも解釈で揺れた箇所も沢山ある。しかしながら、一人一人の勝手な判断や思い込みを極力避けるために、与えられた文章を丹念に読み込んだ上での解釈である。

解釈の多様性は保証されるべきであるが、その解釈は共通の基盤あってこそその一人一人の解釈である。

しかしながらそのような訓練を学校ではあまり受けていないであろうから、この解説を案内としつつ、もう一度現場に立ち返ってほしい。

そして現場からくみとれるものをきちんとくみ取る訓練をすれば確実に回答作成力は上がると思われる。

やみくもに演習するのではなく、問題に徹底的に向き合って自分で納得した回答を作るように心がけてほしい。

その際には、議論することも大事である。議論することによって、このような解釈もありうるのではないか、これはこう読むのがだろうなのではないかというように、テキストの多様な側面が見えてくる。自分では思いもよらなかった解釈に出会うこともある。現代文の回答を議論することはあまりないかもしれないが、これはかなり学びになる。そして何よりも楽しい。是非一度、自分の回答をみんなで議論してみしてほしい。学ぶこと、頭を使うことで最も重要なことは楽しむことである。勉強は楽しみながらするのが一番である。

模範回答があてにならないことは、既に分かったのだから、我々の回答も疑いつつ、さらによい答案を皆さんが書いてくれることを楽しみにしている。もし自信のある答案がかけたならばぜひ教えてほしい。

このAnchorが皆さんのフィードバックによって、より良いものに更新されて行くことを期待して、終わりとする。

引用文献・著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。

他社の解答例講評欄に記載されている解答例は以下の出典より引用しております。

- ・ 『2017年版大学入試シリーズ東京大学（文科）』 教学社編集部・編 2016年
- ・ 『難関校過去問シリーズ 東大の現代文25カ年〔第8版〕』 桑原聡・編著 2016年
- ・ 『大学入試完全対策シリーズ 2017・駿台 東京大学〔文科〕 前期日程(上) 2016～2012/5か年』 駿台予備学校・編 2016年
- ・ 河合塾（総合教育機関・予備校） / 2014年度国公立大二次試験・私立大入試解答速報 <http://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/honshi/14/t01.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 大学入試問題過去問データベース produced by 東進 <http://220.213.237.148/univsrch/ex/menu/index.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 東京大学 教育学部の無料受験過去問/入試問題集【スタディサプリー】 <https://studysapuri.jp/SC000073/kakomon/000000000000132501>（閲覧日：2017年2月18日）